

座談会

渡戸一郎×山崎美貴子

「ネットワークが大切にしてきたものとは」

本誌『ネットワーク』は、次号（336号）からリニューアルされることになりました。これまで『ネットワーク』は、社会の何に着目し、何を取り上げ、そして、何を伝えてこようとしていたのか。改めて、長く『ネットワーク』の編集懇談会座長を務めて頂いている明星大学教授の渡戸一郎さんと東京ボランティア・市民活動センター所長の山崎美貴子を交えた座談会を実施しました。

——まず『ネットワーク』が発行された当初の時代背景から伺っていききたいと思います。



渡戸 1981年に東京都ボランティアセンターが出来ました。この時に初めて発刊したのが『ネットワーク』です。情報媒体としてどういうものを作るべきか、当時、毎日新聞編集委員の坂巻熙ひろむさんとも相談しながら作成していったのを覚えています。私も編集委員で当時はまだ30代。若かったなあ（笑）。もちろん、他にボランティアの情報誌なんてなかったので非常に注目されたんですね。「できるだけボランティア活動の担い手を広げたい」との思いから、自発的な社会参加活動の実践事例を伝えることを優先させて、事例を知る、そこから考える、というページ割にしました。それと、当時使われていた和製英語は「コミュニティ」位でタイトルの『ネットワーク』という言葉は、次の時代を象徴する言葉として浮かんできました<sup>1)</sup>。

——創刊当時の内容はどのようなものが多かったのでしょうか。

渡戸 当時の『ネットワーク』は全体で8ページでした。そのうち、特集が3ページで、その他、海外の情報を伝えるページも試行的に設けたりしましたね。

山崎 まだ、ボランティアが社会化されていない時代でしたよね。「ボランティアしてるんだって、変わってるね」というような時代です。ボランティア活動は一般的な活動であることを広めていこうというところで、『ネットワーク』を発刊した意味もありました。だから、初めは「ボランティアって何？」っていうところから始まっていますね。その後の特集を見ると、「ボランティア学習ってどうしたらいいの？」「財源の集め方はどうしたらいいの？」というものが多い。当時は、障害者のサマーキャンプが



山崎美貴子

盛んでした。ボランティアの創世記を作ったのは、青年や大学生によるボランティア活動だったので、イベントの作り方や児童・生徒の体験ボランティアのすすめ方などのノウハウに関する特集がずっと続いています。一方、社会を見ると、この時代は男は働いて当たり前という中で「働き盛りの男たちとボランティア活動く男たちのもう一つの生き方」という特集が出ていますね。こういうところに目を留めているのは意外だったかと、いま見て感じています。

福祉コミュニティを題材とした特集も見られます。ボランティアの担い手の多くが主婦層であった時代背景の中で、先ほどの男性を取り上げた特集は、「でも違う生き方もあるんだよ」という問題提起をしているように感じます。

渡戸 80年代半ばから在宅福祉活動が広がっていく中で有償ボランティアの議論が出てきました。ボランティアセンターの中にも特別委員会が設置されて、ボランティアの本質的な理念を整理しました。ボランティアの無償性をめぐる議論が浮上した時期だったと思います。ちょうど1988年1月にボランティア活動の4原則を東京ボランティアセンターとして提案しています。

山崎 新しいボランティア活動の価値を生み出さなければならぬ時期でした。社会では在宅福祉が言われる中「家族は福祉の含み資産」とも言われました。一般的には伝統的な価値観もまだ残る中、住民

参加型有償サービスが始まり、ボランティアとの連携の問題も議論されました。ある日はボランティア、ある日は有償家事援助サービスとして関わるという人々もおられる時代状況がありましたね。

——なるほど。『ネットワーク』はそういった問題をさががけて取り上げてきたとも言えますね。当初の「ボランティアって何？」というところから、社会的な時代の変化もあり、その中でボランティア活動の根柢にある価値を問い直す発信までするようになってきた。

渡戸 もう一つ、ボランティア活動が福祉領域から他の領域に広がっていった時期でもありましたね。

山崎 80年代後半から90年代前半の特集を見ると、これまでの取組みとは少し違う、多様な実践事例を取り上げることが分かりますね。ゴミ問題、精神保健福祉、学校に行かない子どもたち、高齢者の社会参加・学習、中国帰国者の問題、災害弱者、若者たちなど。こうした中、広い様々な実践活動を取り上げた『ネットワーク』は、ボランティア活動という実践を通して透けて見えてくる社会的な課題を発信するようになってきたように感じています。課題提起ほど大げさではなく、非常に地道に、地域の実践を取り上げ、積み重ねていった。これを見てはっとしたのです。地道でコツコツと地域を耕す活動だったんだな、と。しかし、この取組みがあった



渡戸一郎さん

からこそ、市民一人ひとりが社会課題に関われる道筋を提示していくことができたのだと思います。これこそ、他の雑誌ではなかなか見ることのできない『ネットワーク』の本筋でしょう。まさに私たちの宝物ですね。

渡戸 90年代はいろんな課題が出てきましたね。グローバル化、少子高齢化。社会の問題が変化してきました。そして、当事者性の問題も出てくる。一方で、阪神・淡路大震災も踏まえ、ボランティア・市民活動がぐっとクローズアップされてくる。非営利性に着目したNPO活動の議論が出てきました。特定非営利活動促進法につながっていく10年間です。名称も、ボランティア・市民活動という言葉に変わっていききました。

山崎 特集を見ると、実践者、当事者、機関団体にくまなく拾ってきていますね。1995年の阪神・淡路大震災、2000年には三宅島も噴火し、災害ボランティアのことが蓄積されていく。一方で、今までのボランティア活動だけでなく、法人格をもった団体としての活動、例えば企業のCSR、メセナ活動、NPO法人の運営の問題が出てきた時期でもあります。東京都域でも、総合ボランティアセンター構想が出てきて、「ボランティア・市民活動センター」とセンターの名称を変更しました。ただし、ボランティア活動をする個人も大切にしよう、ということ、NPOセンターという名前を選択しなかった。英語では、ボランタリーアクションセンター。ボラ

ンタリーな活動を主軸に置こう、ということですが。さらに、日本ボランティアコーディネーター協会が立ち上がってきて、コーディネーターの重要性が出てくるようになった時期です。コーディネーターに関する特集も幾つか組んでいますね。

そうした新しい議論を含みながら、しかし、「一人ひとりの生き方が社会を変える」、「ともに協働を考える」、「私の願いを声にして」などの90年代の後半から出てきているマイノリティの視点という草の根の視点を大切にしている。組織を作るとかNPOを強化するだけでなく、マイノリティの一人ひとりが大切であること。やはり、ここが『ネットワーク』の中核になっている部分だと感じています。

渡戸 2000年以降、協働とかパートナーシップという言葉も新しく出てきていますね。特集に「企業の社会貢献」という言葉も出ています。ボランティアの協働先として国や自治体だけでなく、市場セクターが出てくる。山崎先生が研究されたコンパクトの紹介も非常に良かったですね。これは、今の時代でもとても意味があることだと思います。

山崎 企業は利潤追求するだけでなく、社会の中の責任を果たすことが大事だと言われてきています。家族や親族などのインフォーマルなセクターがどんどん小さくなってきている中で、「自治体や企業だけではない非営利のセクターを作っていくことが健全な社会である」と英国・その他の先進国は考え、行政・企業・非営利団体が協力して社会を築くため



高橋 紘之

に協議する場がコンパクトです。こうした場を、それぞれ自治体で、自治体らしさを出しながら作っていけると良いですね。

——各地では、様々なセクター間がどうパートナーシップを持っていけるか、という議論が出てきましたね。

さて、少し、話を変えても良いでしょうか。『ネットワーク』は2005年にも一度、リニューアルを行っています。それに伴い、半年間議論を行っているのですが、その時のことについて教えて頂けますでしょうか。

渡戸 予算の問題があり、毎月発行していたのを隔月としました。それと、ニュースレターではなく、冊子体にして、いわゆる現在発行している『ネットワーク』の形となりました。冊子体なので、当時からどこまで広く浸透させられるかが大きな課題でした。

山崎 当時は、インターネット環境も大きく変わってきた時期でした。速度感のある情報はポラ市民ウェブ<sup>2</sup>で発信、一方、テーマ性を大事にして掘り下げていくものを『ネットワーク』で発信するという役割分担を行いました。また、ちょっとした映画だったり、「ききマネ」のようなノウハウも入れ込んでいきましたね。少し、一ひねりさせた感じでしょうか。ボランティアの持っている文化を生活様式の

中に入れ込むようなイメージです。それと、東京のボランティア活動の歴史をまとめて書いた連載がありました。あれは、相当な取材量があったと思います。

——リニューアル後の『ネットワーク』では、深く掘り下げる部分と、もっと広く市民にボランティア活動を啓発していく部分と分けていく予定です。例えば、深く掘り下げていくとすると、どんなテーマが考えられるでしょうか。

渡戸 全体を振り返ってみると、宗教とボランティアズムというテーマは取り上げていないですね。関東学院大学教授の橋本和孝さんが『縁の社会学—福祉社会学の視点から—』（ハーベスト社）という本をまとめています。宗教の話にしくても良いですが、「縁」は儒教的であり、仏教的な用語でもある。つまり、アジア的な基盤の中で、ボランティアズムをどのようにとらえたらよいか。こうした宗教的あるいは民俗的な視点で取り上げてみてはどうでしょうか。中国や韓国にしたって格差社会が広がってきている。日本だけの課題ではない。一方で、ボランティアな活動も広がってきている。国境を越えて、いったい自分たちが持っている共通の考え方って何なんだろう？ それぞれの国や地域において、ボランティアアクションをどう位置付けているのだろうか。広い視点からの位置づけが必要ではないかと感じています。



山崎 それは面白そうですね。ボランティアの面白さって、違いが大事というところにある。しかし、それが必然のつながりを作っていて、それによって人の生活も成り立っている。民族によっても地域によっても環境によっても違うつながりがある。一方でネット社会の中でつながり方も変わってきている。その中で縁、つながり方を一度、考えてみるのも良いかもしれないですね。

特に、いま一人ぼっちの人が増えていきますね。その中でボランティアの活動は、実はつながりづくりにもなっています。孤立を防ぐ大事なキーにもなりうるのではないかと思います。そういう中で、この情報誌『ネットワーク』の使命を考えるとボランティアって距離があると思っている人たちに、関わってみようかな、と思ってもらえるようにすることではないかと思っています。

渡戸 エピソードック・ボランティアがいま言われてきています。一時的に短期のボランティアに参加する。ここ10年ぐらい、研究者も注目している人が出てきています。

山崎 日本では、ちよこつとボランティアとか言いますね。こうした事例を沢山紹介していけると良いかもしれません。

渡戸 例えば、イベントのボランティアも良いのではないのでしょうか。この前、東京マラソンがありました

した。様々なボランティアが募集され、多くの人が参加している。そして、参加した人も参加してよかったと感じている人が多い。体験が自分のものになる。こうしたちよつとしたイベントに参加するボランティアは増えているのではないか。これまであまり取り上げてきませんでした。

山崎 地域の特徴を生かしたマラソンが近年各地で盛んになってきています。その中でスイカ畑を走るイベントにボランティアが参加し、ランナーにスイカを渡すものもあります。トウモロコシ畑を走り、トウモロコシを渡すのもある(笑)。

渡戸 いろんな形で、短期間のボランティアが広がってきている。もう少し、光を当てても良いように思います。気軽に参加できて、自分にとって意味があると感じているから広がってきているのでしょう。これらの活動は、今はインターネットにつながって、参加する人が増えてきているようです。

山崎 例えば、東京マラソンのボランティアを募ると、ボランティア側でネットワークができて、情報交換が行われるようになってきています。既存のボランティアセンターから情報を集めるだけでなく、情報を得る方法も多様になってきていることを意識することも必要ですね。

——最後に、改めて、今後の『ネットワーク』に期

待したいことを教えて下さい。

渡戸 一つはボランティアリズムの理念を踏まえた冊子体でいてほしいということ。新しい課題を発見する、オピニオン誌の面も残してほしい。また、即応性のあるボラ市民ウェブとの連動を探してほしい。応援団も作って、書き手をもっと増やしていくことが必要だと思います。

山崎 今までは部数が少なく読者が限定されていた。ただ、内容は深いものを作っていた。そういう意味で、これまでに以上に背骨はしっかりとしつつ、いつでも誰でも入ってこれる、垣根の低さを追求して欲しい。小さな子どもから、寝たきりになっていく方まで、ボランティアって参加できるんです。気づいたらこれもボランティアというところまで広がっていくことを誌面に入れて欲しいですね。

発行部数が大幅に増えますが、地域のボランティアセンターを通して身近なスパーに置いてもらうなど生活の中に広げていく役割を考えていきたい。活動を通して地域の暮らしが見える、「参加してみると面白い」につながるような誌面づくりを心がけていきたいですね。

——ありがとうございます。社会的な背景を踏まえながら、『ネットワーク』が伝えようとしてきたものが何だったのか、振り返ることができました。また、改めて『ネットワーク』の意義も確認するこ

とができました。次号からはリニューアルということとで、さらに多くの市民の皆さんに手にとって読んで頂けるよう、誌面づくりに取り組んで行きたいと思っています。  
(聞き手／高橋紘之・熊谷紀良)

\*1 米国の書籍『ネットワーキング』著・リップナック&スタンブスが邦訳され、ネットワークという言葉の動詞形がもつ社会運動的な側面も注目されるようになり、それを受けてセンター内でも「ネットワーキング」だよね、という議論もあった。

\*2 東京ボランティア・市民活動センターのウェブサイト。http://www.tvac.or.jp

渡戸一郎(わたど・いちろう)

東京ボランティア・市民活動センター運営委員長。  
地方自治協会主任研究員を経て、明星大学教授(都市社会学、市民活動論)。日本都市社会学会常任理事、社会学系コンソーシアム評議員を兼務。

山崎美貴子(やまざき・みきこ)

東京ボランティア・市民活動センター所長。神奈川県立保健福祉大学学長、日本福祉教育・ボランティア学習学会会長等を歴任。現在、神奈川県立保健福祉大学顧問、「広がれボランティアの輪」連絡会議会長のほか、東京災害ボランティアネットワーク代表を兼務。

# 読者からの「コメント」

『ネットワーク』を日頃読んでくださっている方々に「コメントをいただきました。」

大切なのは「誰に向けて発信するのか」ということ



山崎富一  
(NPO法人  
笑顔せたがや)

＊『ネットワーク』の  
全体的な感想

『ネットワーク』がリニューアルしたのは、笑顔せたがやの設立と同時期だったので印象に残っています。私たちの活動とリンクする記事が多いこと、また、つながりのある人や団体がよく登場するのでよく読んでいます。

＊印象に残った特集記事

たとえば「物品寄付」

(307号)。小理屈をこねて

おらず、わかりやすい。ありそうでない啓発的な内容だと思えます。また「市民がつくるみんなの場所」(319号)は、地元のNPOの記事が掲載されていたので興味深く、改めて「場」とは何かを考えさせられました。「さく」ということ(306号)には、

マーカを引いた箇所がたくさんあります。傾聴の講座などで講師を務めるときに参考にしています。こうして振り返ると、社会課題であったり、センターに寄せられたニーズや相談から発生したことを記事にしているのだらうと感じます。

＊誌面に期待すること

表紙に「ボランティア・NPO・市民活動を応援する情報誌」とありますが、3つに

力点を置くのは難しいと思います。誰に向けて発信するのかということを意識して誌面づくりをすれば、要点がより絞れてくるのではないでしょうか。(インタビュー記事)

ゆるやかであり、  
柔軟でアバウトであれ



浅野芳明  
(荒川ボランティア  
アセンター)

荒川ボラセン発行の情報誌

『あらんてあ』は、1984年創刊で、『ネットワーク』は、1981年である。実は、『あらんてあ』は、ネットワークするボランティア情報誌というシヨルダがついており、この当時、ネットワークというキーワードがこの時代から広がり始めたことがうかがえる。

荒川ボラセンでも、一貫してこの「ネットワーク」にこだわり活動をしている。多様な考え方や生き方を大切に、人とひと、グループとグループが「つながり、つながりあう」ことから始まると信じている。ただし、荒川ボラセンの特長は、「ゆるやかであり、柔軟でアバウト」これをモットーにしている。

『ネットワーク』がリニューアルしても、同様に「ゆるやかであり、柔軟でアバウト」な情報誌を追及していただきたいと思ひ、また、どのような情報誌になるのか期待しています。

取っ付きにくくても、  
文が稚拙でも、読者である



福田信章  
(東京災害ボランティアネットワーク)

随分前から私は『ネットワーク』の読者である。最新のボランティア・市民活動の情報を手に入れ、常に気持ちをリセットしながら、活動にソリューションを起こそうと思えば、『ネットワーク』の熱心な読者になるのは必然ではない。必ずしも『ネット

ワーク』で扱っているテーマは最新ではないし、気持ちのリセットすることも、活動にソリューションを起こせるわけではない。もしかすると私よりも真面目な読者にとってはそのような効果があるかもしれないが、少なくとも私にはそのような効果はなかった。

私の『ネットワーク』の読

み方は、文字通りの斜め読み。一通り目を通して、気になるテーマや情報、面白い文章があったら再読する、程度である。だがしかし、私は『ネットワーク』の熱心な読者である。取っ付きやすいテーマは少ないかもしれないけれど、目が向けられにくい課題を丁寧に追っかけようとしているし、読みやすい文章ではないかもしれないけれど、活動しているボランティアやスタッフや当事者の方々を大切にしている姿勢は感じられる。そんな『ネットワーク』がリニューアルするそうだ。こ

れからも、取っ付きにくいけど、ためになる、文章が稚拙でも、取材対象者をリスパクトした情報誌として継続してくれることを願っている。

多様な人が参加する  
誌面づくりに期待



梅澤 稔  
(千代田区社会福祉協議会)

私は東京ボランティア・市民活動センター運営委員をしています。区部の社会福祉協議会職員という立場で東京全体の取り組みについて共に考え、事業への参画もさせていただいています。

ネットワークの中で、いつも「Markey's Notes」と「ききマネ」が大好きで、繰り返し読むほど、とても参考にさせてもらっています。いい記

事は、スタッフにコピーを渡したり回覧をしています。また、職員と打合せをする際も、『ネットワーク』を出して再度確認をするなど、すごく活用させてもらっています。

これまでの『ネットワーク』でもっとも印象に残った記事は、331号の「Markey's Notes」です。青木将幸さんのファシリテーターとしての体験談が語られていて、他人事のように思えないびりっと辛い会議の様子が伝わってきます。

その記事では、ある事業所の長期計画を策定するため、会議のファシリテーターを行ったのですが、途中で突然中止になったということでした。その事業所の先代はその取り組みを良く思っていたことが、ファシリテーターとして何を大事にしなければならなかったかを気づかされたと思いました。

ボランティア活動の場合、

チームで活動することも多く、ファシリテーターの役割がとても大事です。誌面で自分の失敗談を伝えてもらうことで、ハツと気づかせてくれるのはとてもありがたいと思います。

一方、運営委員として『ネットワーク』を広く見ていただきたくらいと思っていますが、すでに活動しているボランティアや仕事として携わる人向けの内容が多いように思います。これから始める人や関心のない方にも見ていただけるような内容になることを期待しています。

例えば、大学ボランティアセンターの特集記事がありました。内容は素晴らしいですが、内容が素晴らしいと見たいと言う人はどれだけの人が、そんなところも意識をするといいたくはないかと思っています。

ボランティア福祉というようなボランティア観を払拭して、いまある社会の課題を

伝えていくことはとても意義のあることだと思います。それをどう伝えるかですね。

この冊子のタイトルは『ネットワーク』。東京ボランティア・市民活動センターのスタッフだけではなく、多様な人が参加して作成されるといいですね。たとえば、プロボノのような人たちに参加してもらうことで、デザインを一新することも可能かもしれません。

このたび、リニューアルすることですが、書店やコンビニに並ぶ『ネットワーク』になることを期待しています。そして、たくさんの人に夢や感動を与えてください。期待していますし、協力もさせていただきます。

## 次回336 (2015年6・7月)号から『ネットワーク』が変わります。

【『ネットワーク』からのお知らせ】

【カラーで読みやすく】 手に取りやすい24ページにスリム化し、内8ページはカラーページになります。

【身近なテーマで】 学生レポートや社会人ボランティアなど身近に感じられるテーマを発信していきます。

【現場の活気をレポート】 取材や寄稿によるボランティア・NPO・市民活動のトレンドも引き続きお届けします。

【プライスダウン】 年間購読料は2,400円(年6冊の発行、1部価格は400円)に変更になります。

東京ボランティアセンター(当時)発足時の1981年から発行してきた情報誌『ネットワーク』は、本誌で335号となりました。この34年間、カタチは幾度か変わりましたが、一貫してその時代を生きる市民のオピニオン誌としての姿を追求してきました。地域社会に潜在する声に耳を傾け、また未来を示唆する活動現場を伝え、私たちがめざす市民社会像について問いかけ続けてきました。ここまで号を重ねられたのも、読者のみなさんの支えがあったからにほかなりません。深く感謝申し上げます。

次号から、より幅広い方に、より身近な視点から読んでいただけるように、リニューアルすることにしました。誌面を一新し、新しい連載もはじまります。ぜひ、ご購入ください!

【問合せ先】 東京ボランティア・市民活動センター 『ネットワーク』編集部  
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ10階  
TEL : 03-3235-1171 / E-mail : nw@tvac.or.jp